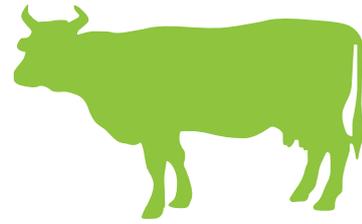


# 牛肉



## ◆ 飼養動向

### 7年2月現在の肉用牛の飼養頭数、前年比2.9%減

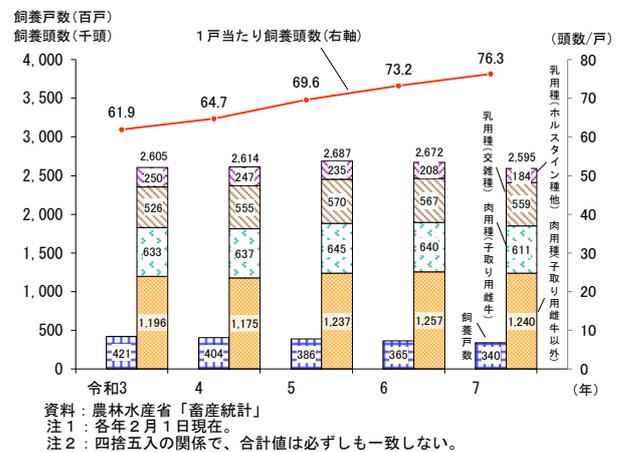
肉用牛の飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向が続いており、令和7年（2月1日現在、以下同じ）は、3万4000戸（前年比6.8%減）と前年からかなりの程度減少した（図1）。

総飼養頭数は、近年増加傾向にあったが、259万5000頭（同2.9%減）と2年連続して前年からわずかに減少した。肉用種と乳用種をそれぞれ見ると、肉用種は185万1000頭（同2.4%減）とわずかに、乳用種<sup>（注）</sup>は74万3800頭（同4.0%減）とやや、いずれも前年から減少した。乳用種のうち交雑種は、55万9400頭（同1.4%減）とわずかに、ホルスタイン種他は、18万4400頭（同11.3%減）とかなり大きく、いずれも前年から減少した。

一方、1戸当たり飼養頭数は、76.3頭（同4.2%増）と前年からやや増加し、同頭数の増加傾向は継続している。

（注）「畜産統計」では、乳用種の肉用牛とは、ホルスタイン種、ジャージー種などの乳用種の牛のうち、肉用を目的に飼養している牛で、乳用種と肉用種の交雑種を含むと定義されている。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



## ◆ 生産

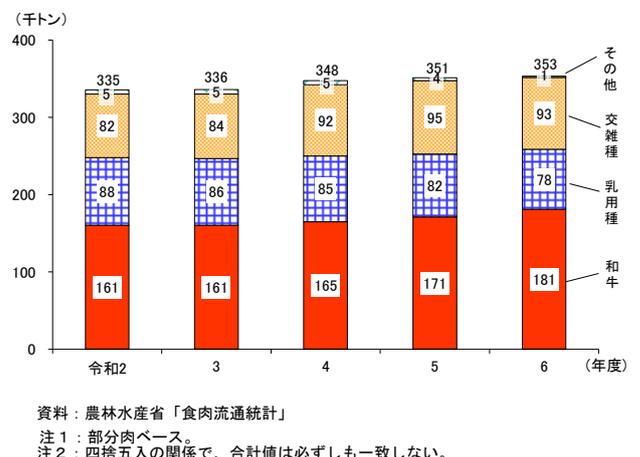
### 6年度の生産量、前年度比0.6%増

牛肉生産量は、畜産クラスター事業の取り組みなどにより、平成29年度以降、和牛を中心におおむね増加傾向で推移している。

令和6年度は、和牛は18万978トン（前年度比5.8%増）と前年度をやや上回った一方、交雑種は9万3150トン（同2.0%減）とわずかに、乳用種は7万7894トン（同4.5%減）とやや、いずれも前年度を下回った（図2）。

この結果、全体では35万3451トン（同0.6%増）と前年度からわずかに増加した。

図2 牛肉の生産量の推移



## ◆ 輸入

### 6年度の輸入量、前年度比0.9%増

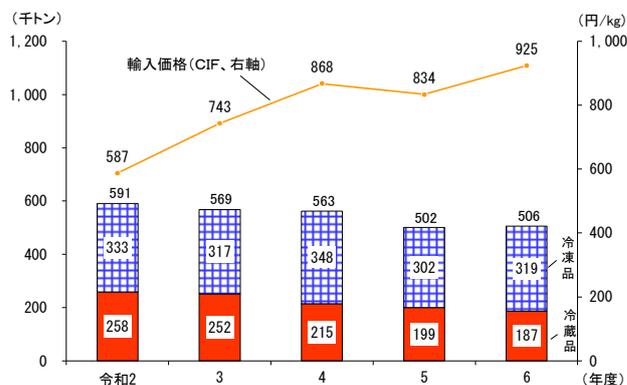
牛肉輸入量は、平成28年度から令和元年度までは増加傾向で推移していたが、令和2年度以降は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）や物価上昇の影響による需要低迷や為替相場の円安傾向の影響などから減少傾向にある。

令和6年度は、米国からの輸入量は引き続き減少している一方、豪州からの輸入量が増加したため、全体で50万6260トン（前年度比0.9%増）と前年度をわずかに上回った（図3）。このうち、冷蔵品は18万6910トン（同6.3%減）と前年度をかなりの程度下回った一方、冷凍品は31万9102トン（同5.7%増）と前年度をやや上回った。

輸入価格（CIF）は、現地価格の上昇や為替相場の円安傾向などにより、1キログラム当たり925円（同10.9%高）と前年度をかなりの程度上回った。

輸入先別では、牛飼養頭数の減少などによる現地相場高などの影響により米国産が17万6562トン（同7.9%減）と前年度をかなりの程度下回った一方、主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加した豪州産が24万1517トン（同9.2%増）と前年度をかなりの程度上回った（図4）。この結果、シェアは、豪州が全体の48%、米国が同35%を占めた。

図3 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格の推移

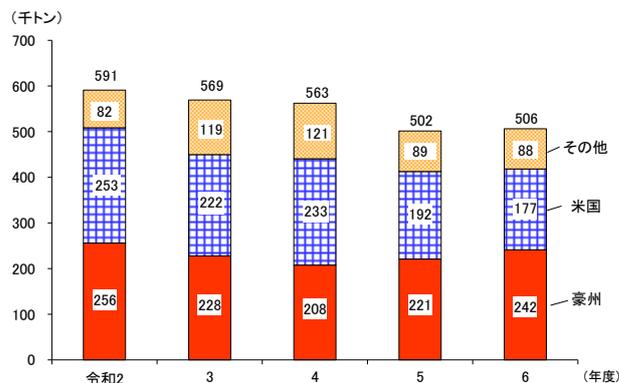


資料：財務省「貿易統計」

注1：部分肉ベース。

注2：合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図4 牛肉の輸入先別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注1：部分肉ベース。

注2：煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

注3：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

## ◆ 輸出

### 6年度の輸出量、前年度比20.3%増

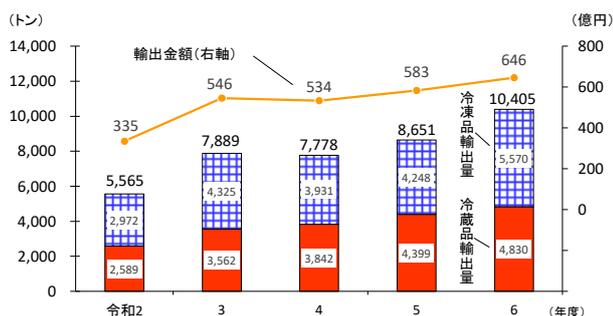
牛肉輸出量は、近年、販路の開拓や販売促進の効果などにより増加傾向で推移しており、令和6年度は、特に米国向けは新規商流開拓、台湾向けは外食需要の増加により増加し、1万405トン（前年度比20.3%増）と大幅に、輸出金額も646億円（同10.9%増）と

かなりの程度、いずれも前年度を上回った（図5）。

輸出量の内訳を見ると、冷蔵品は4830トン（同9.8%増）とかなりの程度、冷凍品は5570トン（同31.1%増）と大幅に、いずれも前年度を上回った。冷蔵品と冷凍品の割合は、4年度および5年度は同程度

で推移していたが、6年度は冷凍品の割合が上回った。

図5 牛肉の輸出量および輸出金額の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注1：部分肉ベース。  
注2：合計は、枝肉・半丸枝肉、骨付きを含む。

## ◆消費

6年度の推定出回り量は前年度比3.3%減、家計消費は同5.1%減

### 推定出回り量

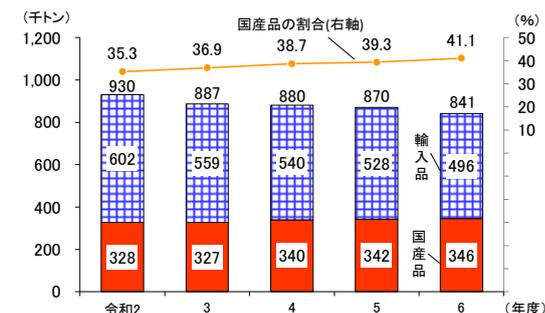
牛肉の推定出回り量は、COVID-19発生後は、その影響によるインバウンド需要や外食需要の減少などにより減少傾向で推移していた。

令和6年度は、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりや為替相場の円安傾向などの影響により輸入量が減少し、84万1435トン(前年度比3.3%減)と前年度をやや下回った(図6)。

出回り量の内訳を見ると、国産品は34万5636トン(同1.0%増)と前年度をわずかに上回った一方、輸入品は49万5799トン(同6.1%減)と前年度をかなりの程度下回った。

なお、合計に占める国産品の割合は41.1%(同1.8ポイント増)と5年連続で前年度を上回った。

図6 牛肉の推定出回り量の推移

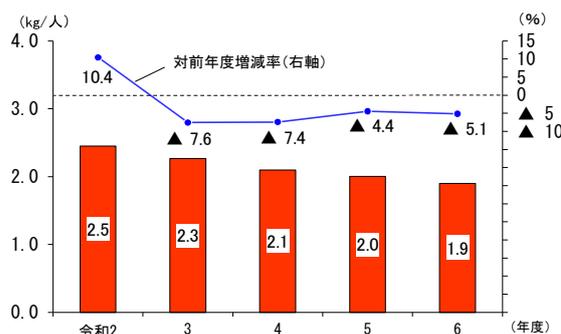


資料：農畜産業振興機構推計  
注1：部分肉ベース。  
注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

### 家計消費

牛肉消費の約3割を占める家計消費について、令和6年度は、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりなどにより、年間1人当たり1.9キログラム(前年度比5.1%減)と、前年度をやや下回った(図7)。

図7 牛肉の家計消費量(全国1人当たり)の推移



資料：総務省「家計調査報告」  
注：1世帯当たりの数値を世帯人数で除して算出。

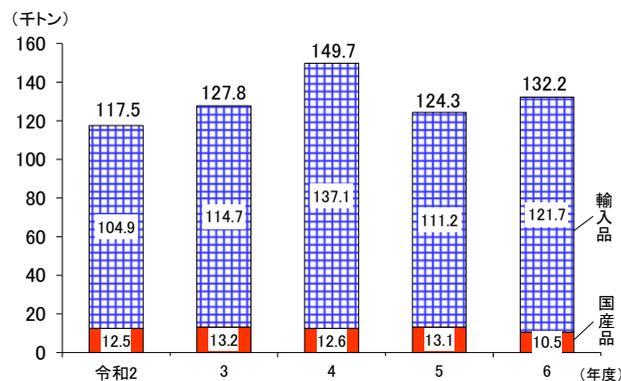
## ◆在庫

### 6年度の推定期末在庫量、前年度比6.3%増

牛肉の推定期末在庫量は、約9割を輸入品が占めており、輸入量の影響を受け、増減を繰り返しながら推移している。

令和6年度は、13万2208トン（前年度比6.3%増）と前年度をかなりの程度上回った。このうち、国産品は1万518トン（同19.8%減）と前年度を大幅に下回った一方、輸入品は12万1690トン（同9.4%増）と前年度をかなりの程度上回った（図8）。

図8 牛肉の推定期末在庫量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
 注1：部分肉ベース。  
 注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

## ◆枝肉卸売価格

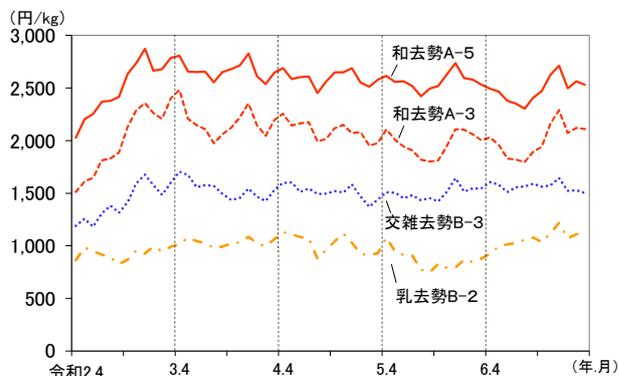
### 6年度の枝肉卸売価格、交雑種、乳用種で上昇

和牛（東京・去勢A-5、A-3）の枝肉卸売価格は、令和6年度は、比較的値頃なA-3では後半にかけて前年を上回る水準となる月が多かった。年度平均では、A-5が1キログラム当たり2483円（前年度比3.1%安）とやや下回った一方、A-3が同2002円（同1.7%高）と前年度をわずかに上回った（図9）。

交雑種（東京・去勢B-3）の枝肉卸売価格は、6年度は年度を通じて前年を上回る月が多く、年度平均では、1キログラム当たり1562円（同4.0%高）と前年度をやや上回った。

乳用種（東京・去勢B-2）の枝肉卸売価格は、6年度は年度を通じて前年を上回る月が多く、年度平均では、1キログラム当たり1064円（同23.3%高）と前年度を大幅に上回った。

図9 牛肉の卸売価格（東京・品種・規格別）の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
 注：消費税を含む。

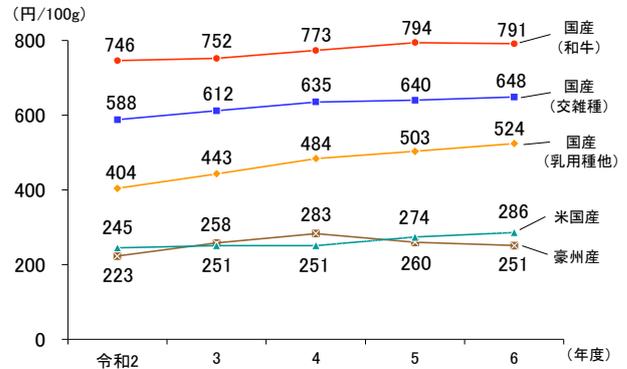
## ◆小売価格

### 6年度の小売価格、国産（交雑種、乳用種他）、米国産で上昇

牛肉の小売価格は、品種や部位によって動きは異なるが、おおむね上昇傾向で推移している。令和6年度は、特に国産（交雑種、乳用種他）、米国産で価格が上昇した。

6年度の小売価格（ばら）は、和牛は100グラム当たり791円（前年度比0.4%安）、国産牛（交雑種）は同648円（同1.3%高）、国産牛（乳用種他）は同524円（同4.2%高）、米国産は同286円（同4.4%高）、豪州産は同251円（同3.5%安）となった（図10）。

図10 牛肉の小売価格（ばら）の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
注：消費税を含む。

## ◆肉用子牛

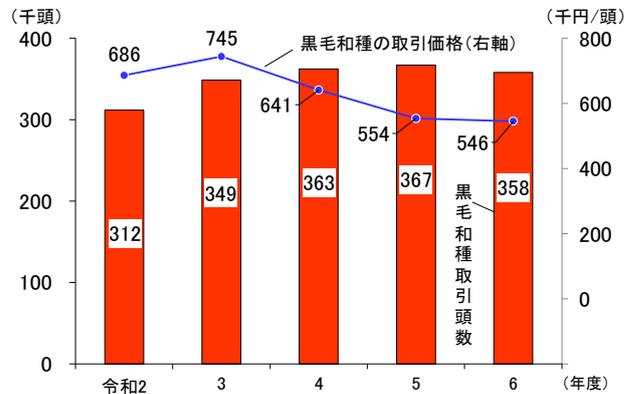
### 6年度の肉用子牛価格、黒毛和種は前年度比1.5%安

#### 黒毛和種

家畜市場における黒毛和種の子牛取引頭数は、令和6年度は、35万8054頭（前年度比2.5%減）と前年度をわずかに下回った（図11）。

黒毛和種の子牛取引価格は、平成28年度をピークに低下する中、令和2年2月以降、COVID-19の影響による枝肉価格の低下に伴いさらに低下した。その後、枝肉価格の上昇などにより回復したが、4年5月に急落してから、和牛枝肉価格の低迷や配合飼料価格の高止まりなどを背景に、肥育農家の子牛購買意欲が減退したことから、子牛価格の下落傾向が継続していた。なお、令和6年11月以降は価格が上昇したが、6年度全体としては、1頭当たり54万6千円（同1.5%安）と前年度をわずかに下回った。

図11 黒毛和種の取引頭数と市場取引価格の推移



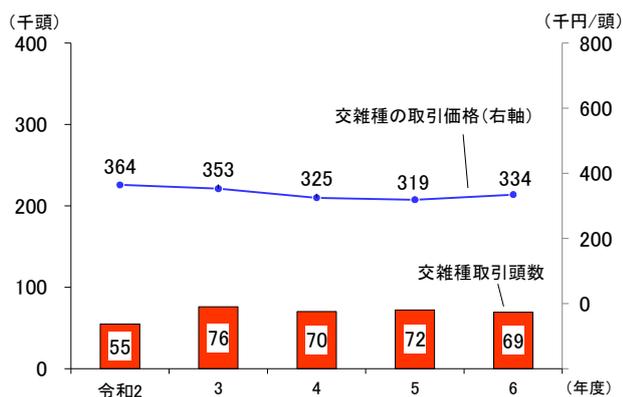
資料：農畜産業振興機構調べ  
注1：消費税を含む。  
注2：市場取引価格は、各月の平均価格の単純平均である。

## 交雑種

家畜市場における交雑種の子牛取引頭数は、令和6年度は、6万9272頭（前年度比3.9%減）と前年度をやや下回った（図12）。

交雑種の子牛取引価格は、6年度は、1頭当たり3万4千円（同4.9%高）と前年度をやや上回った。

図12 交雑種の取引頭数と市場取引価格の推移



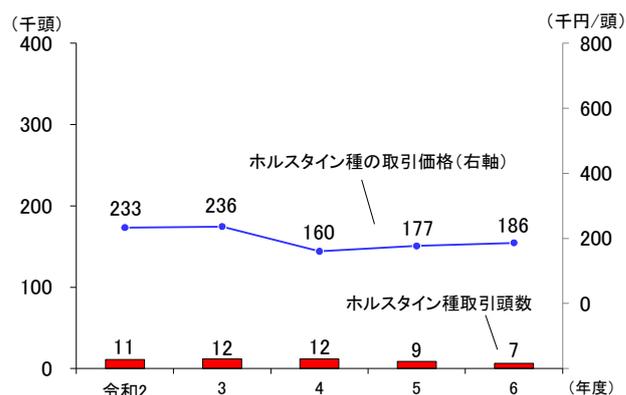
資料：農畜産業振興機構調べ  
 注1：消費税を含む。  
 注2：市場取引価格は、各月の平均価格の単純平均である。

## ホルスタイン種

家畜市場におけるホルスタイン種の子牛取引頭数は、令和6年度は、6666頭（前年度比22.9%減）と前年度を大幅に下回った（図13）。

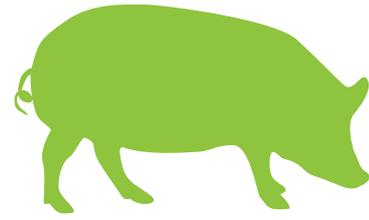
ホルスタイン種の子牛取引価格は、6年度は1頭当たり18万6千円（同5.6%高）と前年度をやや上回った。

図13 ホルスタイン種の取引頭数と市場取引価格の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
 注1：消費税を含む。  
 注2：市場取引価格は、各月の平均価格の単純平均である。

# 豚肉

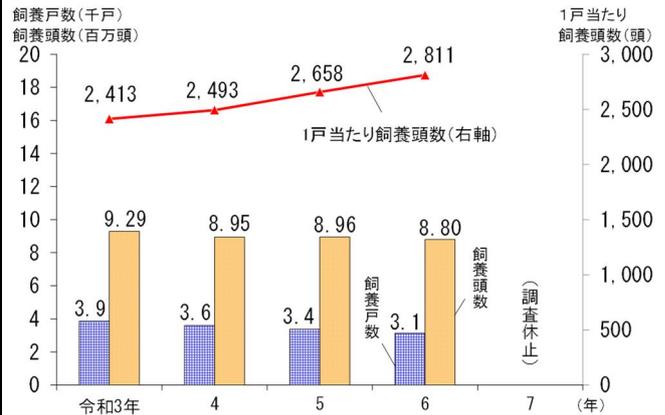


## ◆飼養動向

6年2月現在の1戸当たり飼養頭数、前年比5.8%増

豚の飼養戸数は減少傾向で推移しており、令和6年は、3130戸（前年比7.1%減）と前年からかなりの程度減少し、総飼養頭数も880万頭（同1.8%減）と前年からわずかに減少した（図1）。一方、1戸当たり飼養頭数は、153.3頭増加して2810.9頭（同5.8%増）となった。また、子取り用雌豚の1戸当たりの飼養頭数も17.4頭増の317.3頭（同5.8%増）となった。小規模生産者を中心として飼養戸数が減少し、1戸当たり飼養頭数は増加傾向にある。

図1 豚の飼養戸数および飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：各年2月1日現在。  
 注2：令和7年は農林業センサス実施年のためデータなし。

## ◆生産

6年度の生産量、前年度比1.6%減

豚のと畜頭数は、近年増加傾向で推移していたものの、廃業による飼養戸数の減少などにより3年連続で減少し、令和6年度は、1614万8499頭（前年度比1.5%減）と前年度をわずかに下回った（図2）。

また、同年度の1頭当たりの平均枝肉重量は、79.1キログラムと前年度並みとなった。なお、5年1月1日より26年ぶりに豚枝肉取引規格が改正され、各等級の重量範囲について上限・下限ともに3キログラムずつ引き上げられている。

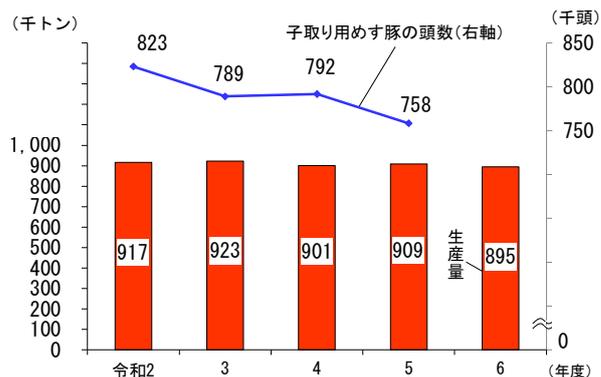
図2 豚のと畜頭数および平均枝肉重量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
 注：平均枝肉重量は全国平均。

生産量についても、同年度は、と畜頭数が減少したことから、89万4534トン（同1.6%減）と前年度をわずかに下回った（図3）。

図3 豚肉生産量および子取り用めす豚の頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」、「食肉流通統計」  
 注1：生産量は、部分肉ベース。  
 注2：子取り用めす豚の頭数は、各年度2月1日現在。令和6年度は農業センサス実施年のためデータなし。

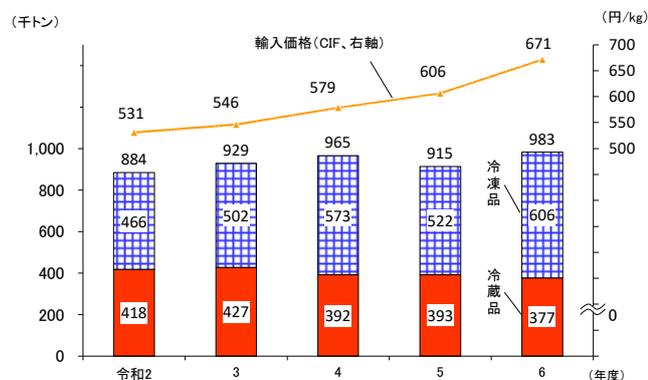
## ◆ 輸入

### 6年度の豚肉輸入量、前年度比7.5%増

#### 豚肉

豚肉の輸入量については、冷蔵品・冷凍品ともに、国内での堅調な需要などから近年増加傾向で推移している。

図4 豚肉の輸入量および輸入価格の推移

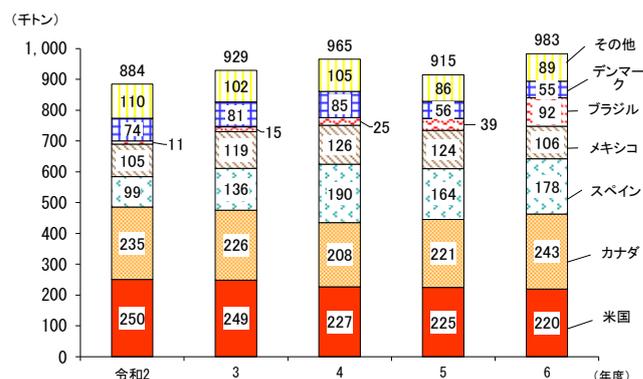


資料：財務省「貿易統計」  
 注1：部分肉ベース。  
 注2：合計にはくず肉を含む。

令和6年度は、98万3276トン（前年度比7.5%増）と前年度をかなりの程度上回った（図4）。このうち、冷蔵品は現地相場高や為替相場の影響などにより米国産が減少したことなどから、37万6866トン（同4.0%減）と前年度をやや下回った。一方、冷凍品は価格優位性のあるブラジル産が増加したことなどから、60万6284トン（同16.2%増）と前年度を大幅に上回った。

また、同年度の国別輸入量は、ブラジル産が9万1936トン（同136.3%増）、カナダ産が24万3486トン（同10.1%増）、スペイン産が17万8370トン（同8.7%増）と前年度から増加した一方、メキシコ産が10万6073トン（同14.4%減）、米国産が21万9789トン（同2.2%減）、デンマーク産が5万4767トン（同1.6%減）と前年度から減少した（図5）。

図5 豚肉の国別輸入量の推移



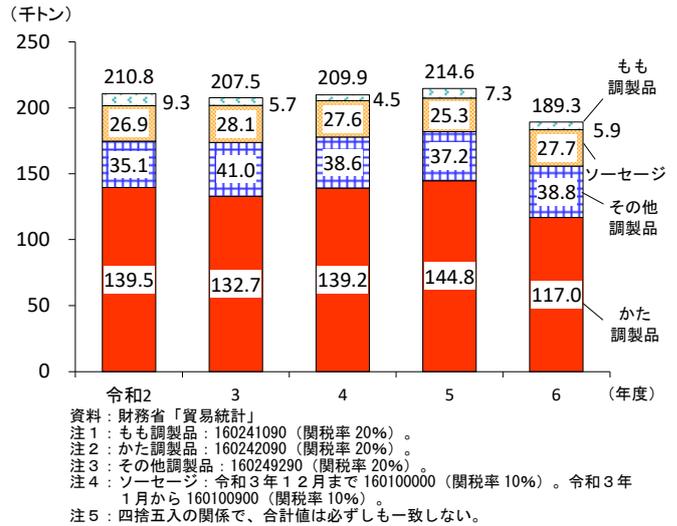
資料：財務省「貿易統計」  
 注1：部分肉ベース。  
 注2：くず肉を含む。  
 注3：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

## 豚肉調製品・ソーセージ

豚肉調製品やソーセージの輸入量については、底堅い需要がある中で、現地相場の変動に伴う増減を繰り返している。

令和6年度の豚肉調製品の輸入量は、ソーセージ、その他調製品の輸入量が前年度を上回った一方、かた調製品、もも調整品の輸入量が前年度を下回った結果、全体では18万9343トン（前年度比11.8%増）と前年度をかなり大きく下回った（図6）。

図6 豚肉調製品およびソーセージの輸入量の推移



## ◆消費

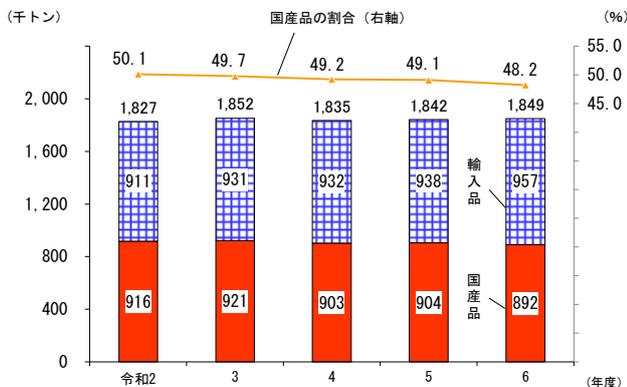
6年度の推定出回り量は前年度比0.4%増、家計消費量は同1.9%減

### 推定出回り量

豚肉の推定出回り量は、堅調な豚肉消費を背景に近年増加傾向で推移している。

令和6年度は、国産品は89万1880トン（前年度比1.4%減）と前年度をわずかに下回った一方、輸入品は95万7280トン（同2.1%増）と前年度をわずかに上回った（図7）。この結果、全体では184万9160トン（同0.4%増）と前年度をわずかに上回った。なお、合計に占める国産品の割合は48.2%（同0.9ポイント減）と前年度を下回った。

図7 豚肉の推定出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構推計

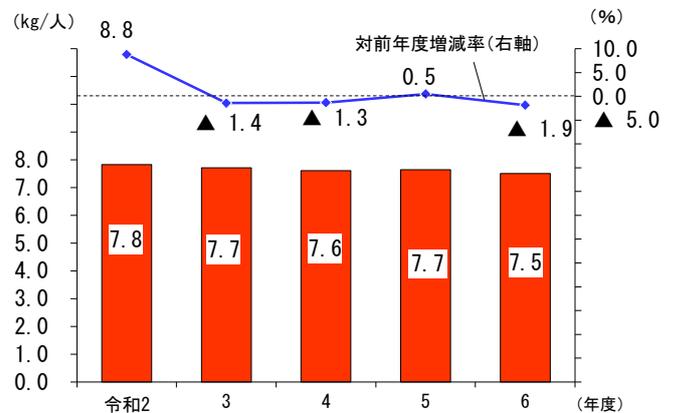
注1：部分肉ベース。

注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

### 家計消費

豚肉消費の約6割を占める家計消費については、年間1人当たりの豚肉の家計消費量を見ると、令和2年度に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による巣ごもり需要により増加し、その後も、物価上昇による牛肉からの需要のシフトなどを背景に横ばいで推移している（図8）。6年度は、7.5キログラム（前年度比1.9%減）と前年度をわずかに下回った。

図8 豚肉の家計消費量（年間1人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

注：1世帯当たりの数値を世帯人数で除して算出

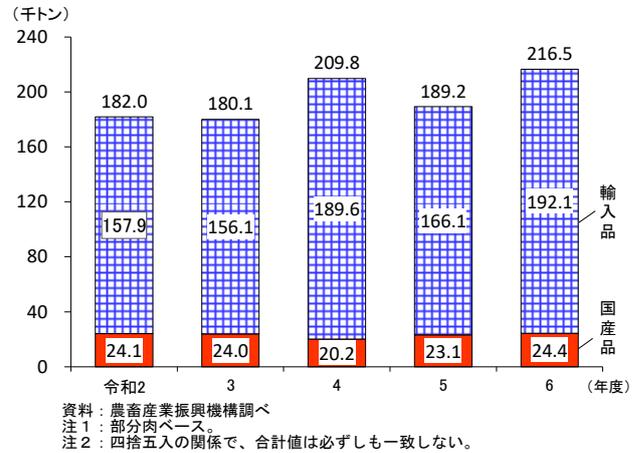
◆在庫

6年度の推定期末在庫量、前年度比14.4%増

豚肉の推定期末在庫量については、約9割を輸入品が占めており、そのうち9割強を冷凍品が占めている。このことから、推定期末在庫は輸入量の影響を受け、増減を繰り返しながら推移している。

令和6年度は、国産品は、2万4424トン（前年度比5.7%増）と前年度をやや上回った（図9）。輸入品も、19万2115トン（同15.6%増）と前年度をかなり大きく上回った。この結果、合計では21万6539トン（同14.4%増）と前年度をかなり大きく上回った。

図9 豚肉の推定期末在庫量の推移



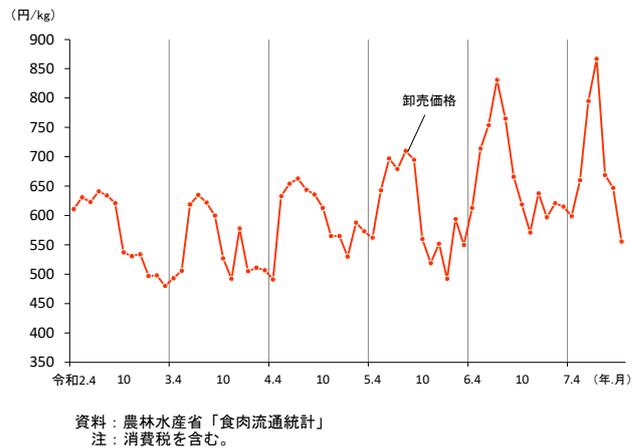
◆枝肉卸売価格

6年度の枝肉卸売価格、前年度比10.4%高

豚枝肉卸売価格（東京、上規格）は、出荷頭数が少なくなる春から夏にかけて上昇基調で推移し、出荷頭数の増加する秋ごろから低下する傾向にある。

令和6年度は、節約志向の高まりなどによる需要の増加により、国産豚肉の引き合いが高く、価格は堅調に推移した（図10）。年度平均では、1キログラム当たり667円（前年度比10.4%高）となった。

図10 豚枝肉の卸売価格（東京、上規格）の推移

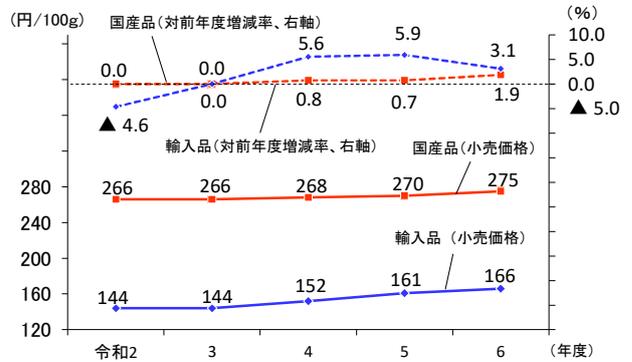


## ◆小売価格

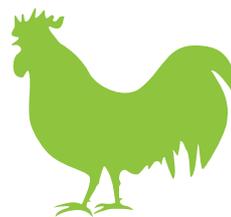
### 6年度の小売価格、国産品および輸入品のいずれも上昇

令和6年度の豚肉の小売価格（ロース）については、国産品は、節約志向の高まりなどによる需要の増加などにより、100グラム当たり275円（前年度比1.9%高）と前年度をわずかに上回った（図11）。輸入品は、為替相場や現地相場高の影響により、同166円（同3.1%高）と前年度をやや上回った。

図11 豚肉の小売価格（ロース）の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
注：消費税を含む。



# 鶏肉

## ◆飼養動向

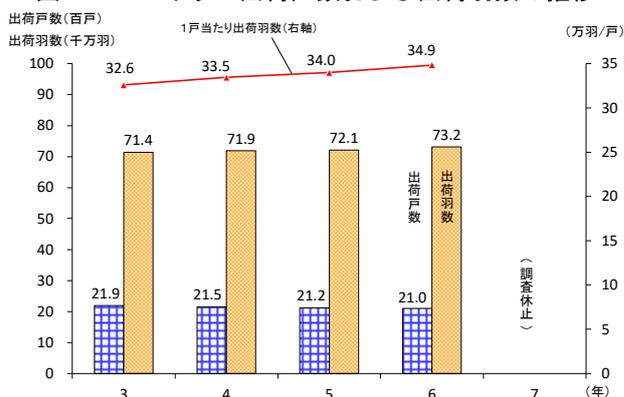
7年2月現在の出荷羽数は前年比1.5%増

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の減少や大規模層（年間出荷羽数50万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方、1戸当たりの平均飼養羽数や平均出荷羽数は年々増加傾向にある。

令和6年のブロイラーの出荷戸数は2100戸（前年比0.9%減）と前年をわずかに下回った（図1）。また、出荷羽数は7億3192万9000羽（同1.5%増）と前年をわずかに上回った。この結果、1戸当たり出荷羽数は34万8500羽（同2.5%増）と前年をわずかに上回った（図1）。

なお、ブロイラーの出荷戸数および出荷羽数を規模別に見ると、ブロイラーの出荷羽数が50万羽以上の層は、出荷羽数全体の53%、出荷戸数全体の15%をそれぞれ占めており、同割合は増加傾向となっている。

図1 ブロイラー出荷戸数および出荷羽数の推移



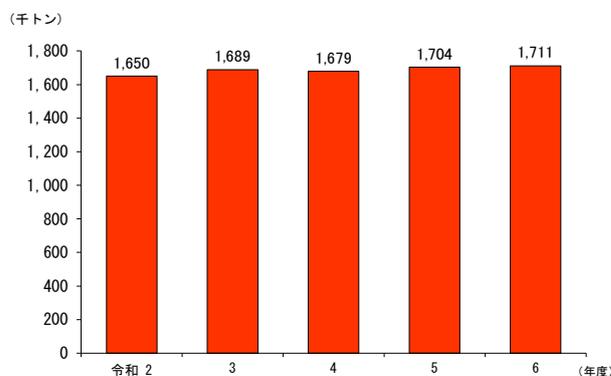
資料：農林水産省「畜産統計」  
注1：各年2月1日現在。  
注2：令和7年は農林業センサス実施年のため、データなし。

## ◆生産

6年度の生産量、前年度比0.4%増

鶏肉の生産量は、消費者の健康志向や根強い国産志向による堅調な需要を背景に、増加傾向で推移しており、令和6年度は171万1025トン（前年度比0.4%増）と前年度をわずかに上回った（図2）。

図2 鶏肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計  
注：骨付き肉ベース。

◆ 輸 入

6年度の輸入量、鶏肉は前年度比1.7%増、鶏肉調製品は同6.5%増

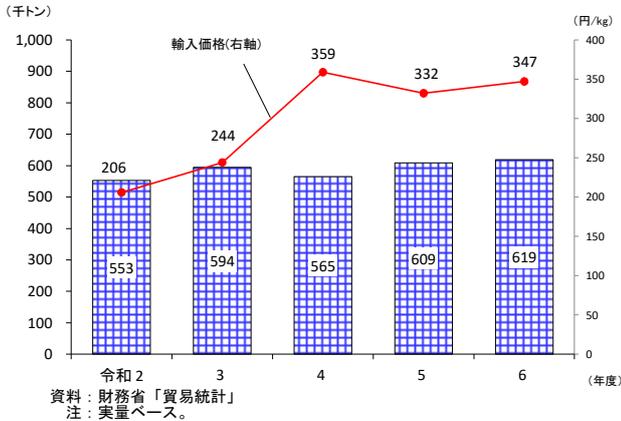
鶏肉

鶏肉の輸入量（冷凍品）は、国内の鶏肉消費量の約4分の1を占めており、近年は50万トンを超えて推移している。

令和5年度は、ブラジルでの高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）発生による影響は見られたが、リスクを見込んだ前倒しでの輸入やタイからの代替輸入により、前年度を上回った。6年度も、国内の節約志向や外食・中食などの好調な需要を受けて、61万8754トン（前年度比1.7%増）と前年度をわずかに上回り、輸入量は過去最高を更新した（図3）。

輸入価格（CIF）は、1キログラム当たり347円（同4.5%高）と前年度をやや上回った。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格（CIF）の推移

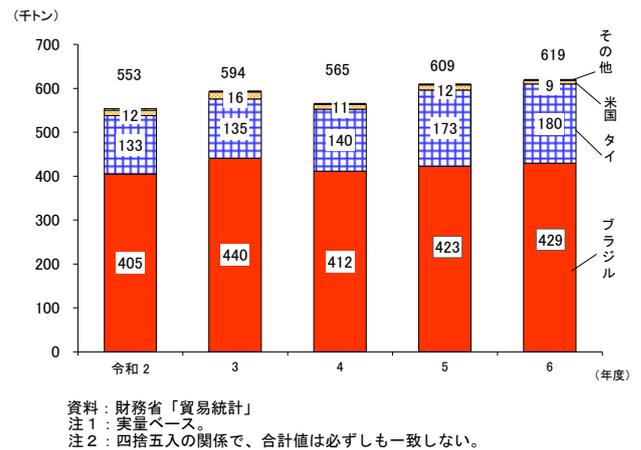


国別の輸入量を見ると、全体の7割を占めたブラジル産については、42万9383トン（同1.6%増）と前年度をわずかに上回った（図4）。

タイ産については、平成25年度の輸入再開以降、細かい規格への対応が可能であることなどから一定数量のニーズを得て推移しており、6年度は18万151トン（同4.1%増）と前年度をやや上回り、5年連続の増加となった。

米国産については、クリスマス需要などに向けられる骨付きもも肉が多くを占めており、8567トン（同30.5%減）と前年度を大幅に下回った。

図4 鶏肉の国別輸入量の推移



## 鶏肉調製品

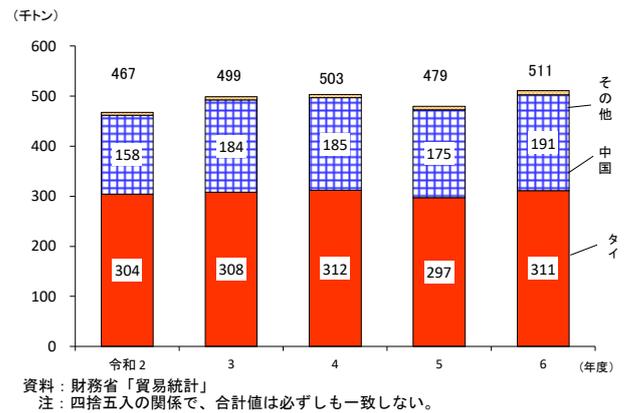
鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、外食・中食需要の高まりや消費者の簡便志向などを背景に増加傾向で推移している。

主な輸入先は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国となっており、両国からの輸入量の合計で全体の98%を占める。

令和3年度以降、輸入量は堅調に推移しており、5年度は円安などの影響により減少したが、6年度は中食需要が回復し、51万786トン（前年度比6.5%増）と前年度をかなりの程度上回った（図5）。

国別の輸入量を見ると、タイ産は、平成30年度以降、30万トン程度の輸入が続き、6年度は31万1359トン（同4.8%増）と前年度をやや上回り、全輸入量に占める割合は61%となった。中国産についても、19万906トン（同9.0%増）と前年度をかなりの程度上回り、同割合は37%となった。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量の推移



## ◆消費

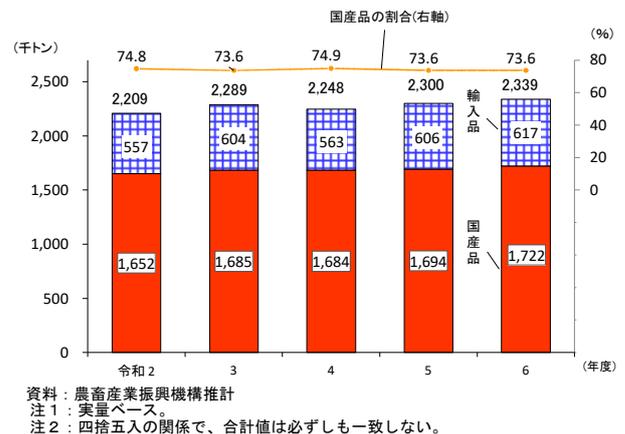
6年度の推定出回り量は前年度比1.7%増、家計消費量は同2.6%増

鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の低価格志向や健康志向の高まりなどにより、特にむね肉を使った商品開発が進んだことなどから、おおむね増加傾向で推移している。

令和6年度は、引き続き外食や中食需要が堅調であることなどから233万8744トン（前年度比1.7%増）と前年度をわずかに上回った（図6）。

出回り量の内訳を見ると、鶏肉消費量全体の約4分の3を占める国産品は、堅調な需要が継続したことで、172万2122トン（同1.7%増）と前年度をわずかに上回った。また、主に加工・業務用に利用されている輸入品も同様に61万6622トン（同1.7%増）と前年度をわずかに上回った。なお、合計に占める国産品の割合は73.6%と前年度と同水準となった。

図6 鶏肉の推定出回り量の推移

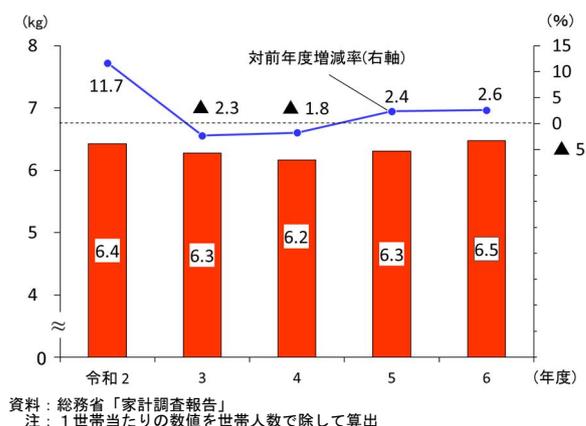


## 家計消費

鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、消費者の健康志向の高まりに加え、食肉の中での価格優位性を背景に、長期的には増加傾向で推移している。

令和2年2月下旬以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響による巣ごもり需要が増加する中、食肉の中でも比較的安価な鶏肉の購入数量が増加し、3年度以降、巣ごもり需要に一定の落ち着きは見られたが、外食需要の回復により、6年度は年間1人当たり6.5キログラム(前年度比2.6%増)と前年度をわずかに上回って過去最高を更新した(図7)。

図7 鶏肉の家計消費量(年間1人当たり)の推移



## ◆在庫

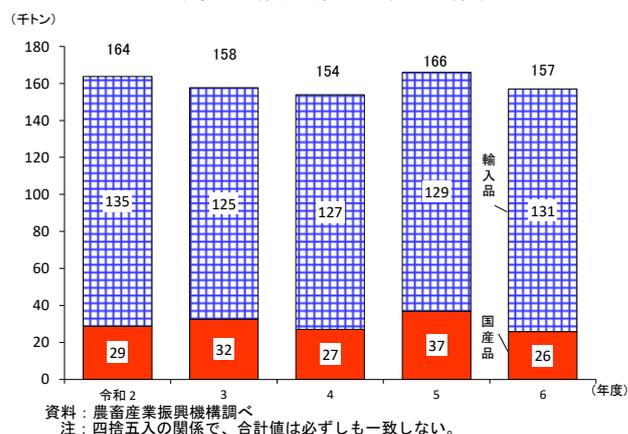
### 6年度の推定期末在庫量、前年度比5.4%減

鶏肉の推定期末在庫量は、その約8割を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。

令和6年度は、輸入鶏肉の高騰から国産鶏肉の引き合いが増えたことなどから、15万7013トン(前年度比5.4%減)となり、2年ぶりに前年度を下回った(図8)。

このうち、輸入品は13万1242トン(同1.7%増)と前年度をわずかに上回った一方、国産品は2万5771トン(同30.1%減)と前年度を大幅に下回った。

図8 鶏肉の推定期末在庫量の推移



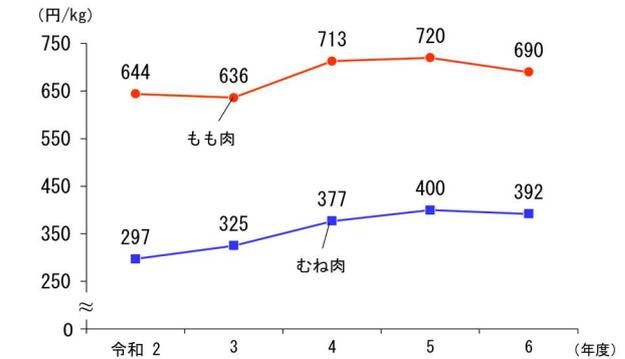
## ◆卸売価格

6年度の卸売価格、もも肉は前年度比4.2%安、むね肉も同2.0%安

国産鶏肉の卸売価格(プロイラー卸売価格・東京)は、日本では「もも肉」に対する消費者の嗜好<sup>しこう</sup>が高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて高くなっている。「もも肉」は、主にテーブルミートに仕向けられており、「むね肉」は総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用が多くなっている。

「もも肉」については、安定的な需要は継続しているが、夏場の低需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する例年の季節性の変動があったことなどから、令和6年度の卸売価格は1キログラム当たり690円(前年度比4.2%安)と前年度をやや下回った(図9)。「むね肉」についても、堅調な需要は継続しており、2年度以降上昇傾向で推移していたが、6年度は同392円(同2.0%安)と前年度をわずかに下回った。

図9 国産鶏肉の卸売価格(東京)の推移



資料：農林水産省「食鳥市況情報」  
注：消費税を含まない。

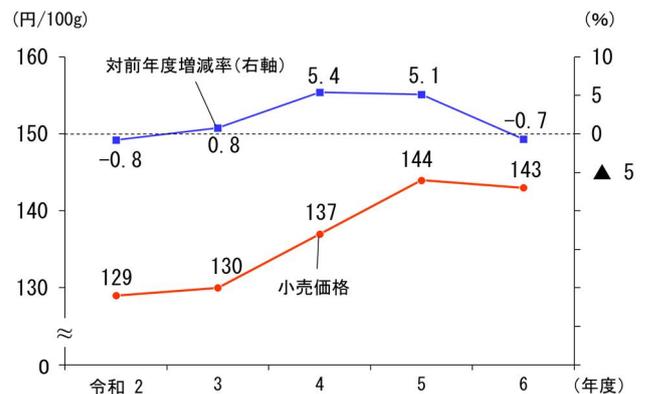
## ◆小売価格

6年度の小売価格(もも肉)、前年度比0.7%安

鶏肉の小売価格(もも肉・東京)は、近年、100グラム当たり130円を超えて推移している。

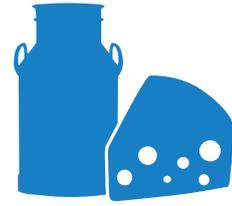
同価格は、令和3年度に4年ぶりに前年度を上回って以降、上昇傾向で推移していたが、6年度は卸売価格の下落などにより同143円(前年度比0.7%安)と前年度をわずかに下回る結果となった(図10)。

図10 鶏肉の小売価格(もも肉・東京)の推移



資料：総務省「小売物価統計調査報告」  
注：消費税を含む。

# 牛乳・乳製品



## ◆飼養動向

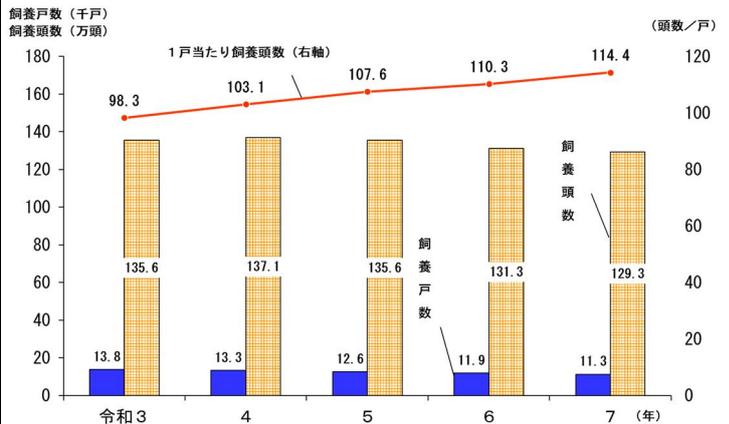
### 7年2月現在の乳用牛飼養頭数、前年比1.5%減

乳用牛の飼養戸数は、酪農家の高齢化や後継者不足、経営不振などにより離農が進んでおり、令和7年は、前年を600戸下回る1万1300戸（前年比5.0%減）とやや減少した（図1）。

飼養頭数は、4年まで6年連続で増加した後、5年に減少に転じ、7年は129万3000頭（同1.5%減）と、3年連続で前年を下回った。

一方、1戸当たり飼養頭数は、114.4頭（同3.7%増）と前年からやや増加した。4年に100頭を超えた以降も、経営の規模拡大の進展が見受けられる。

図1 乳用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



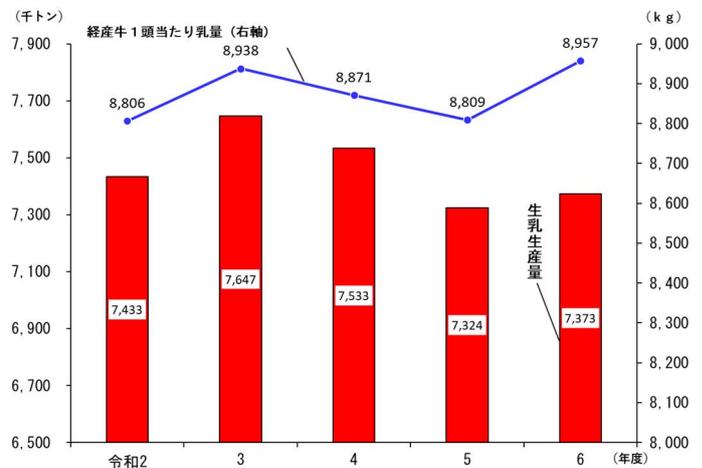
資料：農林水産省「畜産統計」  
注：各年2月1日現在。

## ◆生乳生産

### 6年度の生乳生産量、3年ぶりに前年度を上回る

令和6年度の全国の生乳生産量は、生産者団体による生乳生産抑制の見直しなどの影響により増産基調で推移し、737万3284トン（前年度比0.7%増）と3年ぶりに前年度を上回った（図2）。経産牛1頭当たりの乳量は、8957キログラム（同1.7%増）となった。

図2 生乳生産量・経産牛1頭当たりの乳量の推移（全国）



資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」  
注：経産牛1頭当たりの乳量は、畜産統計および牛乳乳製品統計のデータを基に機構にて算出。

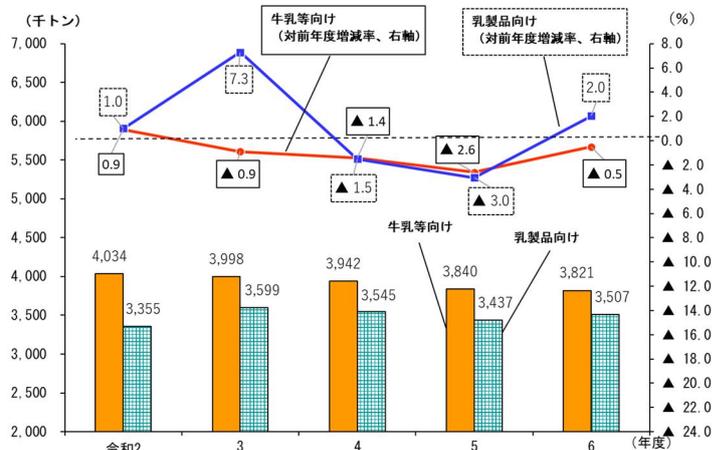
## ◆用途別生乳処理量

### 6年度の乳製品向け処理量、前年度比2.0%増

令和6年度の用途別生乳処理量を仕向け先別に見ると、牛乳等向けは382万743トン(前年度比0.5%減)と4年連続で前年度を下回ったものの、前年度と比べると減少幅は縮小した。市乳化率(生乳生産量に占める牛乳等向け処理量の割合)は51.8%と、前年度から0.6ポイント低下した(図3)。

また、乳製品向け処理量は350万7114トン(同2.0%増)と、3年ぶりに前年度を上回った。

図3 用途別生乳処理量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

## ◆乳製品向け処理量

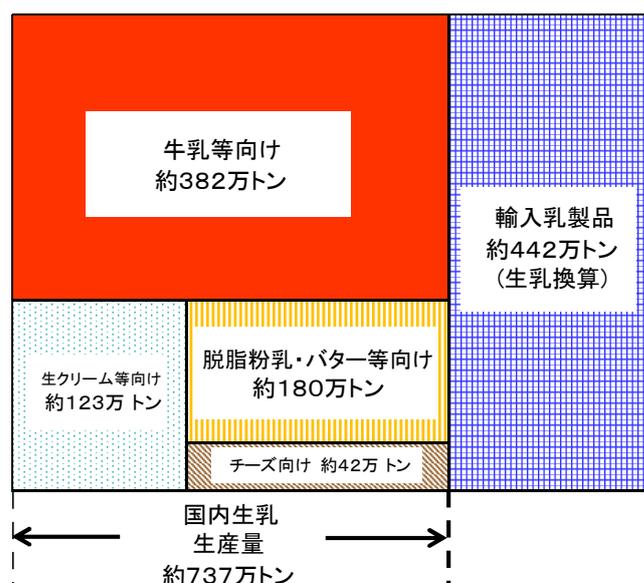
### 6年度の脱脂粉乳・バター等向け生乳処理量、2年ぶりに前年度を上回る

令和6年度の生乳の需給構造を見ると、国内生乳生産量の52%が牛乳等向け、48%が乳製品向けに仕向けられた(図4)。

このうち乳製品向け処理量を区分別に見ると、脱脂粉乳・バター等向けは約180万トン(前年度比4.1%増)、生クリーム等向けは約123万トン(同0.2%増)と、いずれも2年ぶりに前年度を上回った。一方、チーズ向けは約42万トン(同0.9%減)と、2年連続で前年度を下回った。

また、輸入乳製品(生乳換算)は、約442万トンと前年度からやや増加した。

図4 生乳の需給構造の概要(令和6年度)



資料：農林水産省「畜産・酪農をめぐる情勢」

注1：国内生乳生産量の中には、このほか、その他の用途向け(約5万トン)の生乳がある。

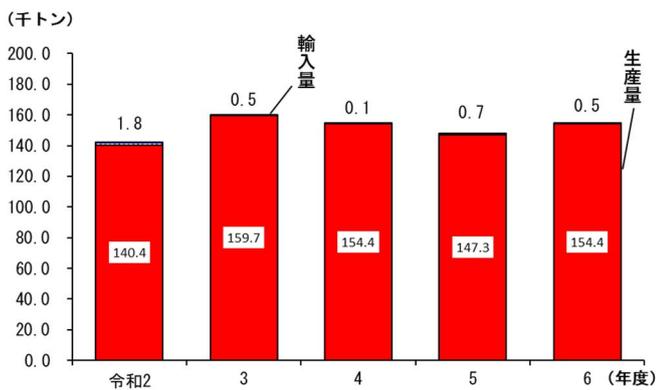
注2：生クリーム等向けは、生クリーム・脱脂濃縮乳・濃縮乳に仕向けられたものをいう。

◆ 脱脂粉乳

6年度の民間期末在庫量、3年ぶりに増加に転じる

令和6年度の脱脂粉乳の生産量は、15万4429トン（前年度比4.9%増）と、生乳生産量の増加に伴い、3年ぶりに前年度を上回った。また、同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、499トン（同24.3%減）となった（図5）。

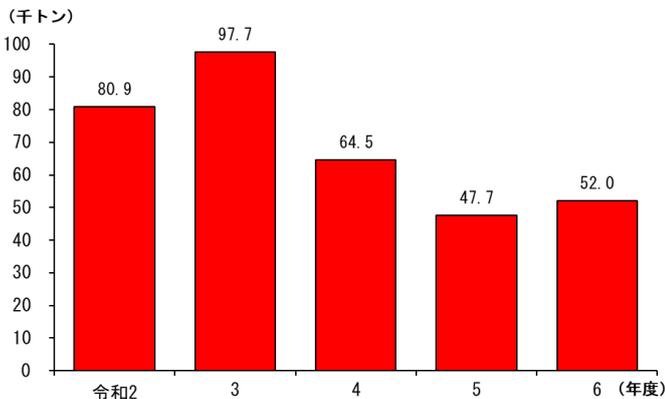
図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構調べ  
注：輸入量は機構輸入分のみ。

こうした中、6年度の推定出回り量は15万716トン（同8.5%減）と、在庫低減対策数量の減少により前年度を下回った。この結果、6年度末の民間期末在庫量は、5万1989トン（同9.0%増）と3年ぶりに増加に転じた（図6）。

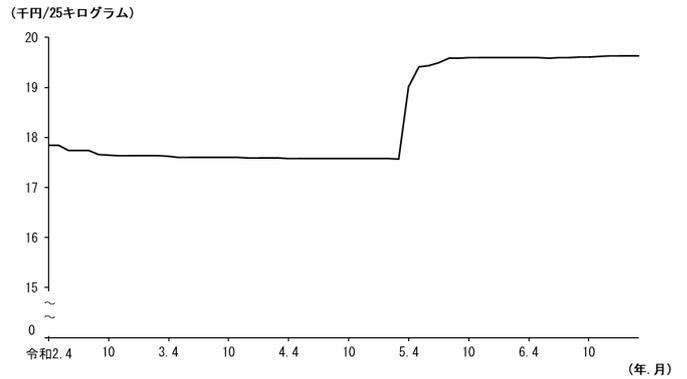
図6 脱脂粉乳の民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

6年度の脱脂粉乳の大口需要者価格（年度平均）は、25キログラム当たり1万9611円（同0.5%高）と、乳価改定の影響により上昇した前年度に続いて、わずかに上昇した（図7）。

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格の推移



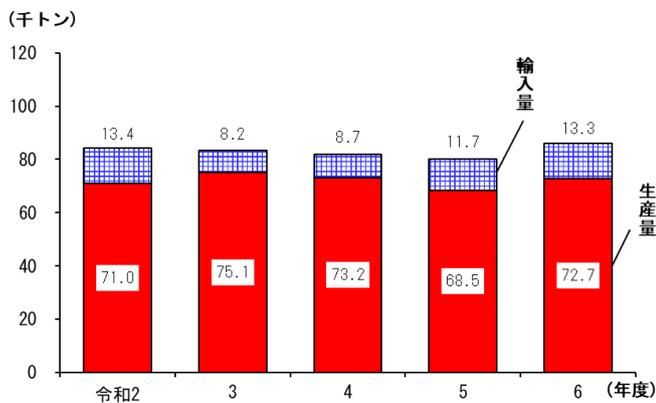
資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」  
注：消費税を含む。

◆バター

6年度の生産量、3年ぶりに前年度を上回る

令和6年度のバターの生産量は、7万2671トン（前年度比6.2%増）と、脱脂粉乳と同様、3年ぶりに前年度を上回った。同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、同年6月に4000トンのバターの輸入枠数量を追加で設定したことを受けて、1万3257トン（同12.9%増）とかなり大きく上回った（図8）。

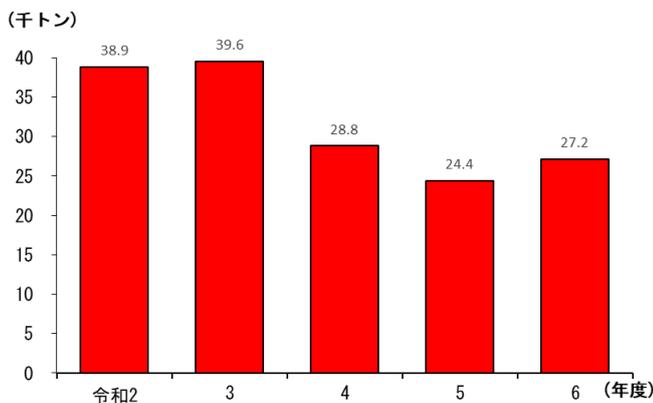
図8 バターの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構調べ  
注：輸入量は機構輸入分のみ。

一方、同年度の推定出回り量は、8万3521トン（同1.6%減）とわずかに減少した。この結果、同年度の民間期末在庫量は2万7159トン（同11.2%増）と、生産量の増加などから前年度をかなり大きく増加した（図9）。

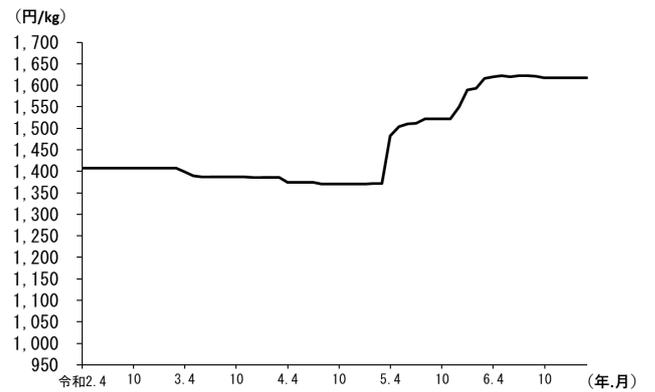
図9 バターの民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

6年度のバターの大口需要者価格（年度平均）は、1キログラム当たり1620円（同5.4%高）と、乳価改定の影響により上昇した前年度に続いて、やや上昇した（図10）。

図10 バターの大口需要者価格の推移



資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」  
注：消費税を含む。

## ◆チーズ

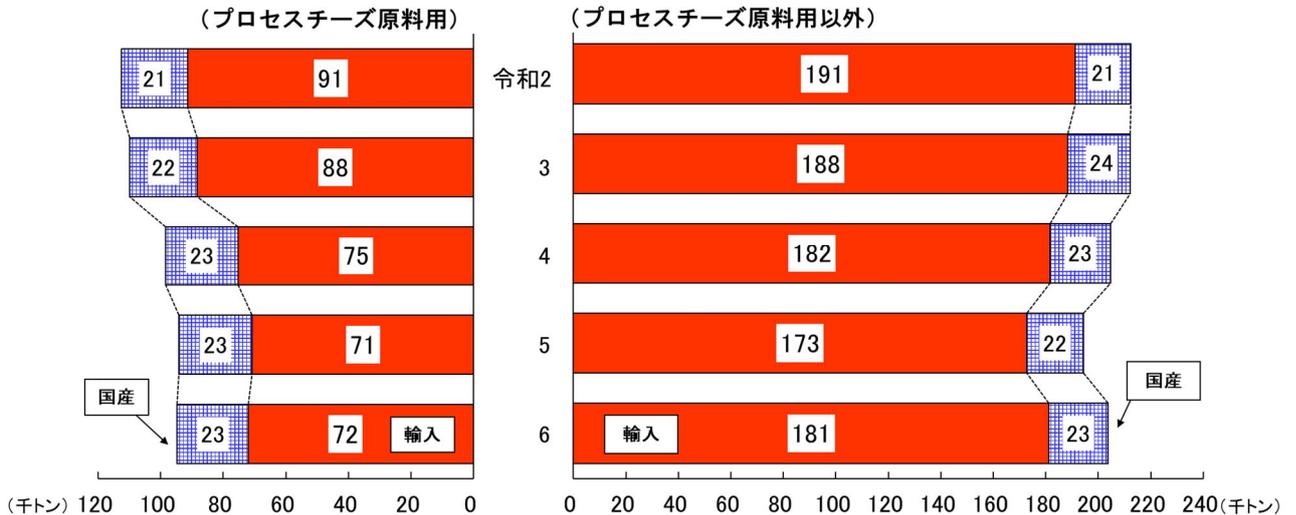
### 6年度の総消費量、前年度比3.5%増

#### チーズの生産量・輸入量

令和6年度の国産ナチュラルチーズの生産量は、4万5372トン（同0.5%増）と前年度からわずかに増加した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が2万2762トン（同2.6%減）とわずかに減少した一方、プロセスチーズ原料用以外が2万2609トン（同3.9%増）とやや増加した。

ナチュラルチーズの輸入量は、25万3047トン（前年度比4.0%増）とやや増加した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が7万1934トン（同1.6%増）とわずかに、プロセスチーズ原料用以外が18万1113トン（同4.9%増）とやや、いずれも増加した（図11）。

図11 ナチュラルチーズの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」

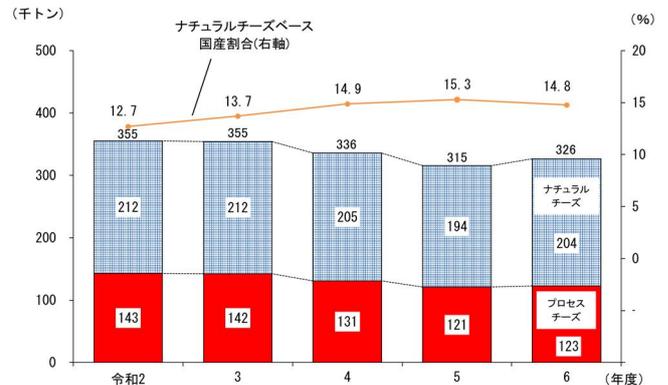
注：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費用、業務用、その他原料用として使用された量。

#### チーズの総消費量

令和6年度のナチュラルチーズ消費量は、20万3723トン（前年度比4.8%増）となった。また、プロセスチーズ消費量は、12万2692トン（同1.4%増）となった（図12）。

この結果、ナチュラルチーズとプロセスチーズを合わせた総消費量は32万6415トン（同3.5%増）とやや増加した。

図12 チーズの総消費量と国産割合の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」

## チーズ総消費量の内訳

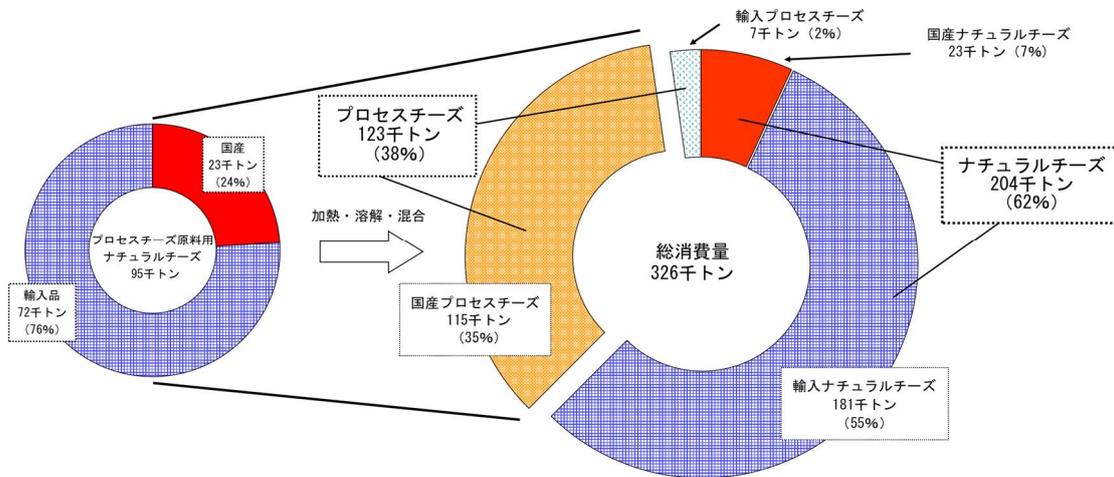
令和6年度のチーズ総消費量に占める国産チーズの割合は、国内生産量がわずかに増加したものの、輸入も増加したことから14.8%（ナチュラルチーズベースに換算した自給率）となり、前年度より0.5ポイント低下した。

チーズ総消費量のうち、ナチュラルチーズについては、国産が2万2609トン（前年度比3.9%増）、輸入品は18万1113トン（同4.9%増）と、ともに前年

度をやや上回ったことから、国産の割合は11.1%と前年より0.1ポイント下降した（図13）。

また、プロセスチーズ原料用のナチュラルチーズについては、国産が2万2762トン（同2.6%減）と前年度をわずかに下回り、輸入品が7万1934トン（同1.6%増）とわずかに上回ったことから、国産の割合は24.0%と前年度より0.8ポイント低下した。

図13 令和6年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省「チーズの需給表」  
 注1：プロセスチーズ原料以外とは、直接消費量、業務用、その他の原料用として使用されたもの。  
 注2：四捨五入の関係で、必ずしも合計値が文中の数字と一致しない。

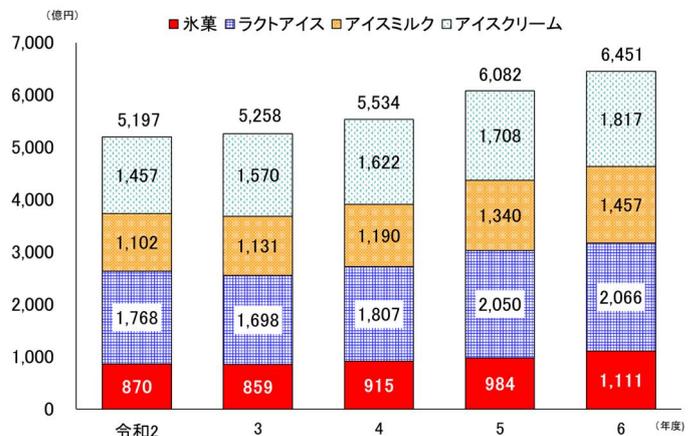
## ◆アイスクリーム

### 6年度の販売金額は過去最高

令和6年度のアイスクリームの販売金額は、6451億円（前年度比6.1%増）と、過去最高となった。（図14）。一般社団法人日本アイスクリーム協会は、この要因として、消費者ニーズに応える高付加価値商品の展開や、価格改定に伴う販売単価の上昇を挙げている。

需給動向を見ると、国産アイスクリーム生産量は14万7540キロリットル（同7.8%増）とかなりの程度増加したことに對し、輸入量は6255トン（同2.4%減）とわずかに減少した。

図14 種類別アイスクリームの市場規模の推移



資料：一般社団法人日本アイスクリーム協会「2024年度 アイスクリーム類及び氷菓 販売実績」、農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」

# 鶏卵



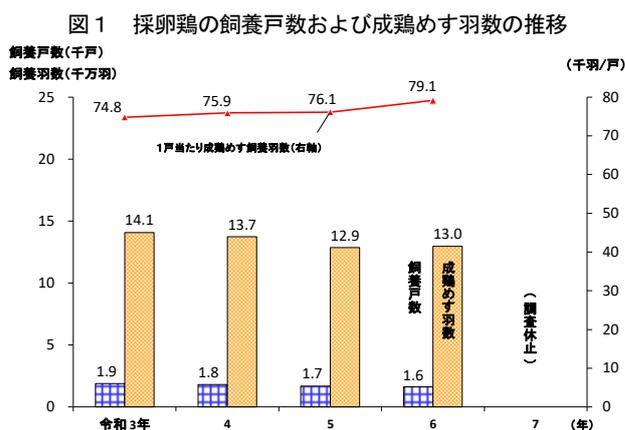
## ◆飼養動向

### 6年2月現在の成鶏めす飼養羽数、前年比0.9%増

採卵鶏の飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移している。令和6年は、1640戸（前年比3.0%減）と前年をやや下回った（図1）。

成鶏めす（6カ月齢以上）の飼養羽数は、3年以降、高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）発生の影響により減少傾向で推移していたが、6年は1億2973万羽（同0.9%増）と前年をわずかに上回った。この結果、1戸当たり成鶏めす飼養羽数は、7万9100羽（同3.9%増）と前年をやや上回った。なお、種鶏を除く採卵鶏の飼養羽数は1億6860万羽（同0.7%減）と前年をわずかに下回った。

また、成鶏めすの飼養戸数および飼養羽数を規模別に見ると、10万羽以上を飼養する層は、飼養戸数全体の約20%、飼養羽数全体の約80%をそれぞれ占めており、同割合は増加傾向となっている。

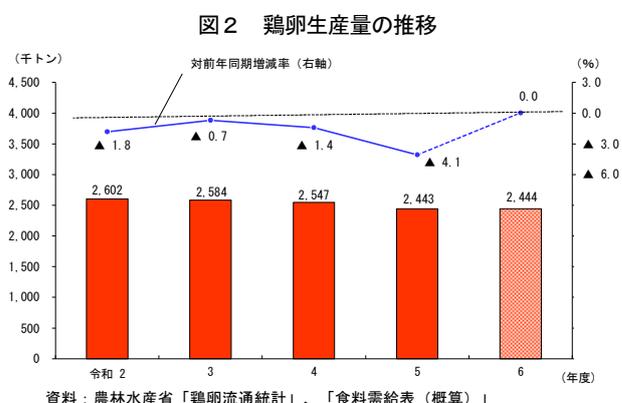


資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：各年2月1日現在。  
 注2：成鶏めすとは、種鶏を除く6カ月齢以上のめすをいう。  
 注3：飼養戸数は、種鶏のみの飼養者を除く。  
 注4：令和7年は農林業センサス実施年のため、調査休止。

## ◆生産

### 6年度の生産量、前年度比23.6%減

鶏卵生産量は、平成27年度以降、家庭用、業務・加工用ともに需要が旺盛であったことなどから、前年度を上回って推移していたが、令和2年度には260万1842トン（前年度比1.8%減）と6年ぶりに減少した（図2）。しかし、2年度以降は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により価格が低下したことや、HPAIの記録的な発生の影響により、それぞれ前年度を下回って推移してきたが、6年度（4～12月）は244万4000トン（同0.0%増）と前年度並みとなった。



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」、「食料需給表（概算）」

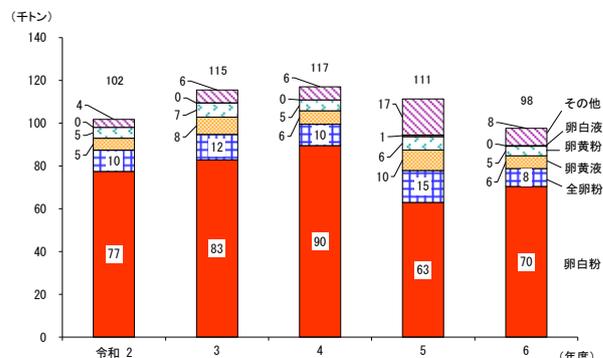
## ◆ 輸 入

### 6年度の輸入量、前年度比12.3%減

鶏卵（ふ化用除く）の輸入量（殻付き換算）は、国内消費量の4%程度で推移している。輸入量のうち約9割は加工原料用の粉卵が占めており、主にオランダ、イタリアおよび米国から輸入している。また、粉卵の輸入量のうち約7割は卵白粉となっている（図3）。

令和3年度以降は日本国内でのHPAI発生の影響による加工用国産鶏卵の代替需要などから増加傾向で推移していたが、6年度は、前半に国内の需給が緩和したことなどにより、9万7591トン（前年度比12.3%減）と前年度をかなり大きく下回った。

図3 鶏卵輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注1：殻付き換算ベース。  
注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

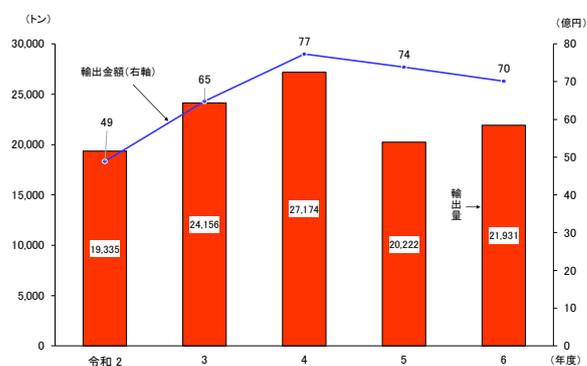
## ◆ 輸 出

### 6年度の輸出量、前年度比8.5%増

近年、鶏卵（殻付き卵）の輸出量は、高い衛生管理による品質や安心感が評価され、増加傾向で推移したが、令和6年度は、依然として輸出先国での需要の低迷などから2万1931トン（前年度比8.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った一方、同輸出額は70億1051万円（同5.1%減）と前年同月をやや下回った（図4）。

輸出先については、香港向けの同輸出量が2万1505トンと全輸出量の98%、同輸出額が67億8459万円と全輸出額の97%を占めており、その他、シンガポール、グアムとなっている。

図4 鶏卵の輸出量および輸出金額の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：殻付き卵。

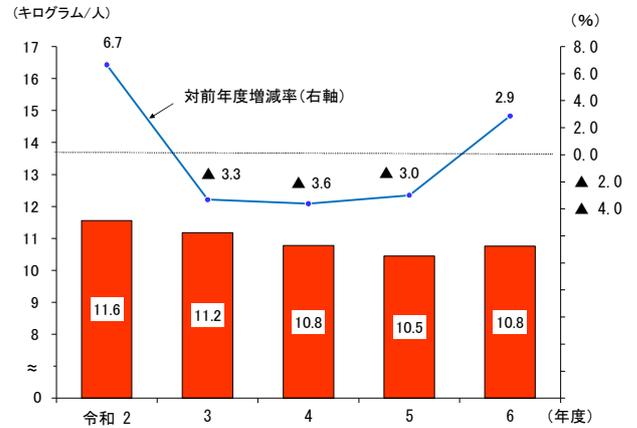
## ◆消費

### 6年度の1人当たり家計消費量、前年度比2.9%増

鶏卵の家計消費量は、量販店などで販売されるテーブルエッグに加え、近年、食の簡便化に対応してコンビニエンスストアなどで販売されている卵加工品の需要の高まりを受け、概ね安定的に推移している。

年間1人当たりの家計消費量は、令和3年度以降はHPA I発生に伴う供給の減少による価格上昇などを背景に減少傾向にあったが、6年度は10.8キログラム(前年度比2.9%増)と前年度をわずかに上回った(図5)。

図5 鶏卵の家計消費量(年間1人当たり)



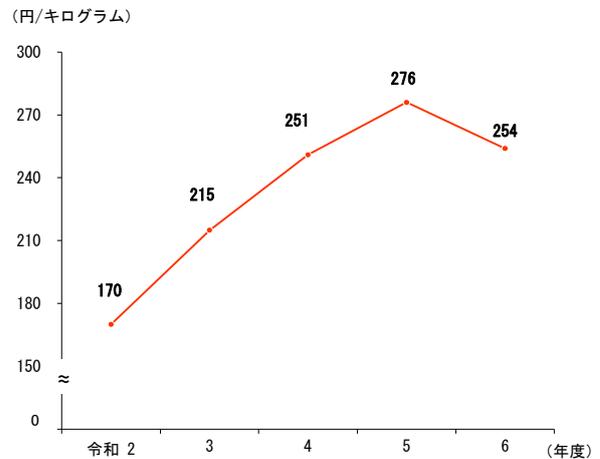
資料：総務省「家計調査報告」  
注：1世帯当たりの数値を世帯人数で除して算出

## ◆卸売価格

### 6年度の卸売価格、前年度比8.0%安

鶏卵の卸売価格の指標となるJA全農たまごの相場情報によると、令和3年度以降は、HPA I発生に伴う供給の減少のほか、業務用需要が回復傾向にあることや生産コストの上昇などからそれぞれ前年度を上回っていたが、6年度は1キログラム当たり254円(前年度比8.0%安)と前年度をかなりの程度下回った(図6)。

図6 鶏卵の卸売価格(東京、Mサイズ基準値)



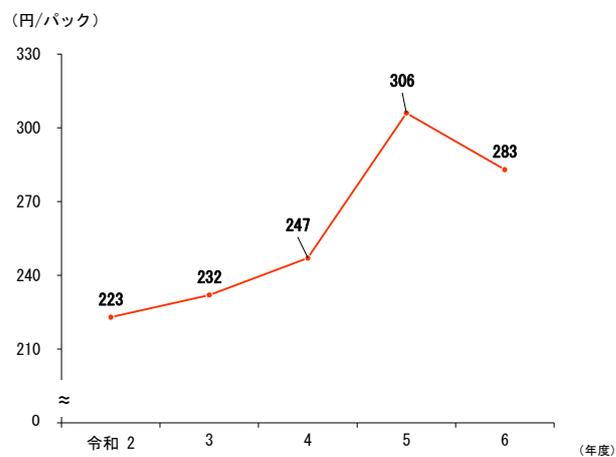
資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」  
注：消費税を含まない。

## ◆小売価格

## 6年度の小売価格、前年度比7.5%安

鶏卵小売価格（東京都区部）は、令和6年度の鶏卵の卸売価格（東京、Mサイズ基準値）が年度後半から上昇傾向で推移し、年度末には前年を超える水準まで上昇した一方、小売価格は低迷が続き、1パック当たり283円（前年度比7.5%安）と前年度をかなりの程度下回った（図7）。

図7 鶏卵の小売価格（東京都区部）



資料：総務省「小売物価統計調査」

注1：消費税を含む。

注2：価格は、サイズ混合（卵重「MS52g～LL76g未満」、  
「MS52g～L70g未満」または「M58g～L70g未満」）。



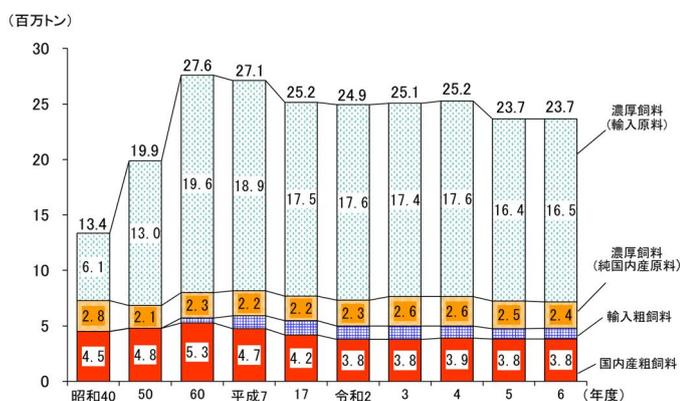
# 飼料

## ◆飼料需要量の推移

6年度の飼料自給率は、前年度から1ポイント低下し26%

飼料の需要量は、近年は2500万トン（TDNベース）前後で推移しており、令和6年度（概算）は、前年度並みの2367万7000トン（前年度比0.1%増）となった（図1）。

図1 飼料需要量（TDNベース）の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

注1：TDN（可消化養分総量）とは、家畜が消化できる養分のエネルギー含量を示す単位であり、飼料の実量とは異なる。

注2：濃厚飼料（純国内産原料）とは、国内産の飼料用小麦・大麦などを原料とした濃厚飼料である。濃厚飼料（輸入原料）には、輸入農産物の副産物（輸入大豆から搾油した後の大豆かすなど）も含む。

注3：昭和59年度までの輸入は、すべて濃厚飼料とみなしている。

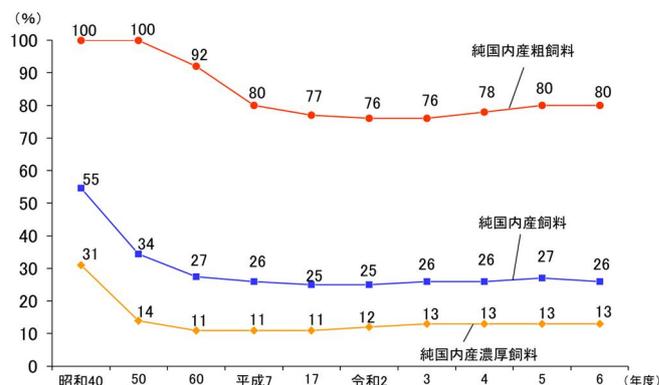
注4：令和6年度は概算値。

飼料の自給率を見ると、6年度（概算）の純国内産飼料自給率〔（純国内産粗飼料供給量＋純国内産濃厚飼料供給量）／総需要量〕は、前年度から1ポイント減の26%となった（図2）。

また、純国内産粗飼料自給率は、国内供給量が前年度からほぼ横ばいに推移したため、前年度同の80%となった。

純国内産濃厚飼料自給率は、飼料用米の作付面積および収穫量が減少し、それを代替する形でトウモロコシの輸入量が増加したが、前年度同の13%となった。

図2 飼料自給率の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

注：令和6年度は概算値。

## ◆飼料作物の生産

飼料作付面積は、飼料用米等の作付面積の減少により4.2%減

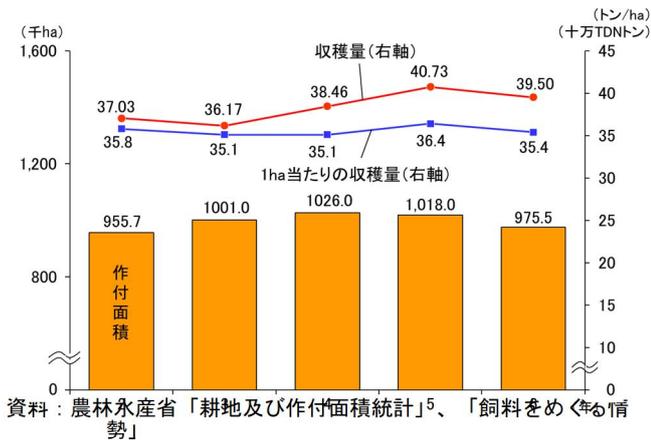
飼料作物の作付面積は、畜産農家戸数や飼養頭数の減少に加え、農家の高齢化による労働力不足などに伴い長らく微減傾向で推移していた。しかし、平成22年以降は、稲発酵粗飼料（ホールクロップサイレージ、WCS）および飼料用米の作付けが拡大した結果、28年まで増加傾向で推移した。

令和6年は、飼料用米、牧草などの作付面積の減少により、97万6000ヘクタール（前年比4.2%減）

となった（図3）。

また、飼料作物の収穫量（TDNベース）は、近年は増加傾向で推移していたが、6年は、牧草、青刈りトウモロコシが増加した一方、飼料用米の減少により、380万トン（同4.0%減）と前年をやや下回った。

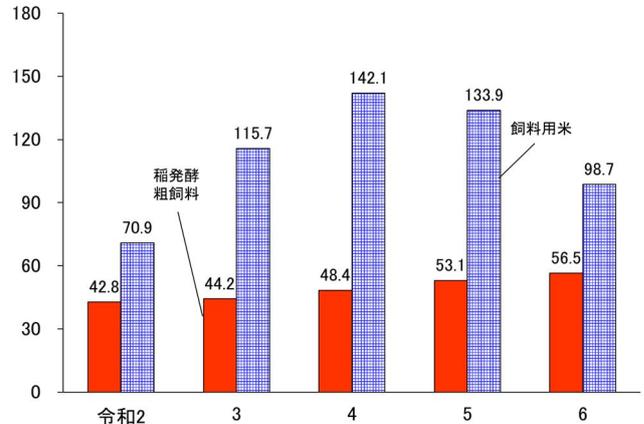
図3 飼料作物の生産の推移



稲WCSの作付面積は、近年増加傾向で推移しており、6年度は、前年度から3424ヘクタール増加し、5万6479ヘクタール（同6.5%増）となった（図4）。

一方、飼料用米の作付面積は、令和5年度から減少傾向で推移しており、6年度も、前年度から3万5259ヘクタール減少し、9万8666ヘクタール（同26.3%減）と大幅に減少した。

図4 稲WCSおよび飼料用米の作付面積の推移



## ◆粗飼料の輸入

### 6年度の輸入量、乾牧草はやや増加

乾牧草の輸入量は、令和4年度は、自給粗飼料の収穫量増加により、192万4653トン（前年度比8.0%減）と、5年ぶりに200万トンを下回った。（図5）。5年度は円安などによる価格の高止まりや販売業者などが抱える輸入在庫から輸入は伸び悩み、165万9425トン（同13.8%減）とかなり大きく減少したが、6年度は168万6516トン（同4.0%増）とやや増加した。

また、ヘイキューブの輸入量は、引き続き減少傾向で推移しており、6年度は8万6193トン（同4.2%減）となった。

乾牧草およびヘイキューブの輸入価格（CIF）は、近年、主産地における国内需要や新興国などの需要が堅調である中、天候や為替相場により変動している。6年度は、円安基調の継続などから価格は高止まりしているが、下落傾向にあり、乾牧草、ヘイキューブともに前年度を下回った（図6）。

図5 粗飼料の輸入量の推移

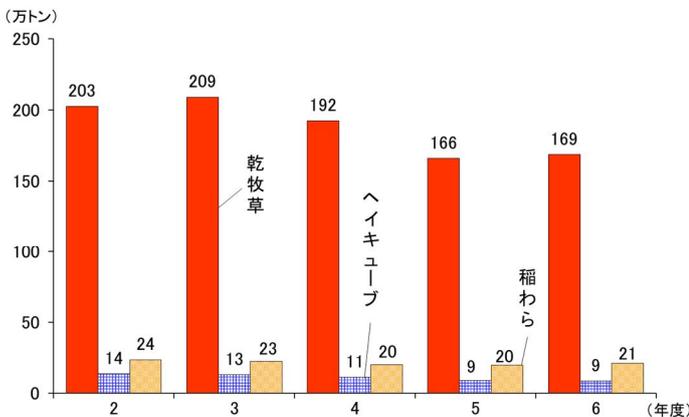
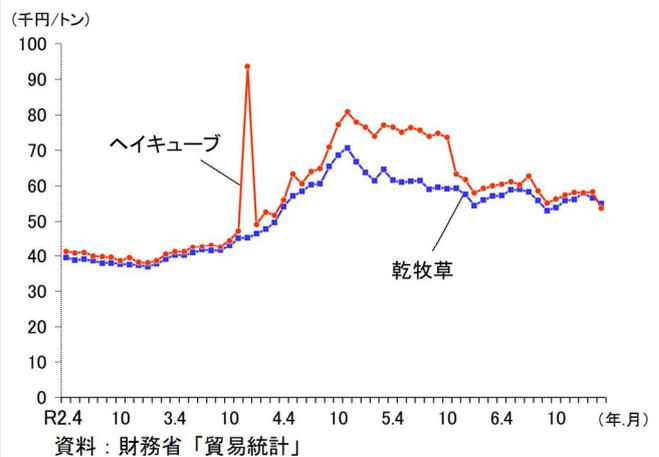


図6 粗飼料の輸入価格（CIF）の推移

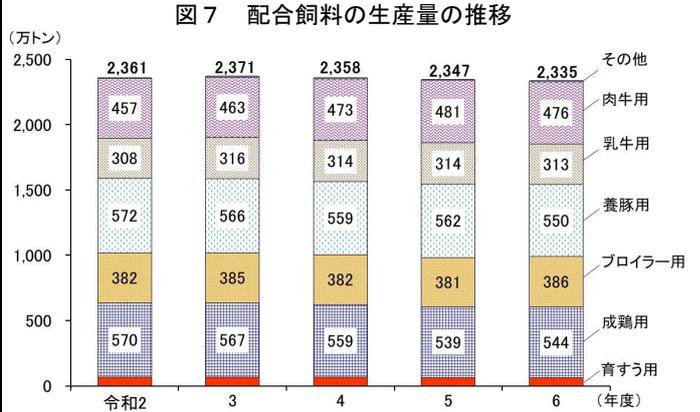


### ◆ 配合飼料の生産

6年度の生産量は2335万トンで微減

配合飼料の生産量は、昭和63年度をピークに家畜飼養頭羽数の減少に伴って緩やかに減少していたが、近年は横ばいで推移しており、令和6年度は2335万428トン（前年度比0.5%減）となった（図7）。

畜種別で見ると、養鶏用が990万5350トン（同0.7%増）、うち成鶏用が544万3405トン（同0.9%増）、ブロイラー用が385万7430トン（同1.3%増）となり、養豚用は549万8249トン（同2.2%減）、乳牛用は313万3153トン（同0.2%減）、肉牛用は475万8815トン（同1.1%減）となった。



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」〈速報版〉  
（公社）配合飼料供給安定機構「飼料月報」

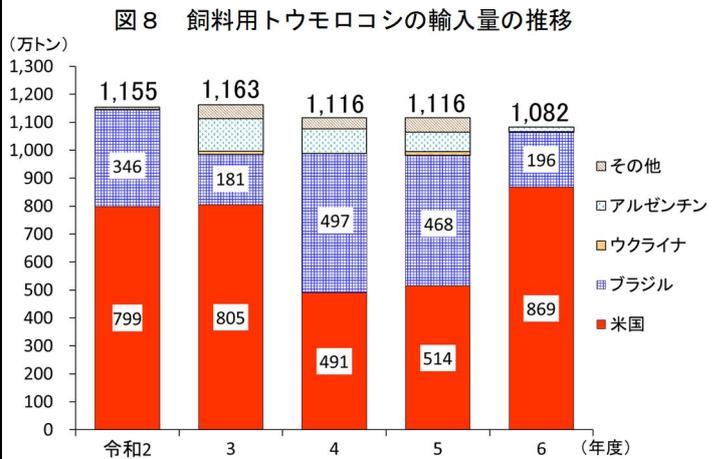
### ◆ 飼料用トウモロコシの輸入

6年度の輸入量は、ブラジル産が大幅に減少した一方、米国産は大幅増加

配合飼料の原料穀物（トウモロコシ、こうりゃん、大麦、小麦など）のほとんどを輸入に依存しており、輸入量の8割以上をトウモロコシが占める。

トウモロコシの輸入量は、前年度をやや下回り、令和6年度は1082万1217トン（前年度比3.1%減）となった（図8）。

6年度の輸入量を輸入先別に見ると、前年度やや減少したブラジル産は他作物への転作などにより作付面積が減少し、196万3614トン（同41.9%減）と大幅に減少した。一方、米国産は豊作による単収の増加などから868万6635トン（同68.9%増）と大幅に増加した。



資料：財務省「貿易統計」

### ◆ 配合飼料価格

6年度の配合飼料工場渡し価格は、前年度比2.4%安

配合飼料価格は、飼料穀物の国際相場、海上運賃、為替相場などの動向を反映する。令和6年度の工場渡し価格は、1トン当たり8万6591円（前年度比2.4%安）と前年度並みとなった（図9）。

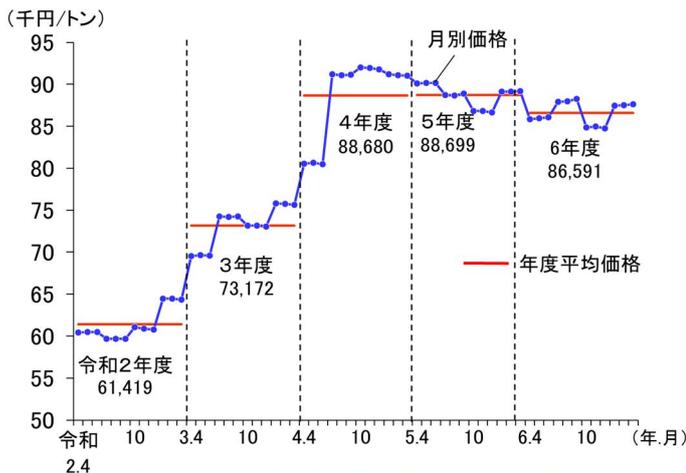
畜産経営では、生産費に占める配合飼料費の割合が高い。このため、配合飼料価格の上昇が畜産経営に及ぼす

影響を緩和する措置として、民間の自主的な積み立てによる通常補填制度と、通常補填で対処し得ない価格高騰に対応するため、国と民間が財源を拠出する異常補填制度が導入されている。令和2年度は、中国の需要増加などを背景にシカゴ相場が上昇したことから、第4四半期に8期ぶりに通常補填が発動した（表）。3年度第1四

半期は通常補填が発動するとともに、16期ぶりに異常補填が発動し、続く3年度第2四半期～4年度第4四半期も通常・異常補填ともに発動した。

5年度からは新たな特例措置として、一定期間にわたり連続で補填が続いた後の配合飼料の高止まりなどの場合、飼料コストの急騰を段階的に抑制する緊急補填の仕組みを導入し、同第1～3四半期に緊急補填が発動した。6年度は発動がなかった。

図9 配合飼料の価格動向の推移



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」＜速報版＞および（公社）配合飼料供給安定機構「飼料月報」  
注：全畜種加重平均の配合飼料工場渡し価格。

表 配合飼料の価格（建値）改定および補填状況

(単位:円/トン)

適用期間	価格改定額 (対前期差)	補填単価		
		通常	異常	緊急 <sup>※2</sup>
令和2年度 第1四半期	▲ 800	-	-	-
2四半期	▲ 1,000	-	-	-
3四半期	+ 1,350	-	-	-
4四半期	+ 3,900	3,300	3,300	-
3年度 第1四半期	+ 6,600	9,900	3,999	5,901
2四半期	+ 2,300	12,200	4,934	7,266
3四半期	▲ 3,700	8,500	4,372	4,128
4四半期	▲ 3,300	5,200	3,451	1,749
4年度 第1四半期	+ 4,350	9,800	5,039	4,761
2四半期	+ 11,400	16,800	5,454	11,346
3四半期	+ 0	7,750	7,254	496
4四半期	▲ 1,000	950	623	327
5年度 第1四半期	▲ 2,000	7,050	-	7,050
2四半期	▲ 2,000	5,250	-	5,250
3四半期	▲ 2,700	1,050	-	1,050
4四半期	+ 2,800	-	-	-
6年度 第1四半期	▲ 4,600	-	-	-
2四半期	+ 2,200	-	-	-
3四半期	▲ 4,850	-	-	-
4四半期	+ 2,750	-	-	-

資料：全国農業協同組合連合会（JA全農）、農林水産省

注1：価格改定額はJA全農の全国全畜種総平均。

注2：令和5年度以降、制度に「緊急補填」の仕組みを導入。